和歌

万葉集　―　現代語訳　―

天智天皇が、蒲生野で薬狩りをなさったときに、額田王が作った歌

紫草を栽培する野を行きながら、その御料地を行きながら、（ああ、そんなことをして）野の番人が見るではありませんか、あなたが袖を振る姿を。

皇太子が応えて詠んだ御歌

紫草のように美しいあなたをもし嫌いだったとしたら、人妻であるのに、どうしてこんなにも恋い慕ったりしようか。

軽皇子が、安騎の野で宿泊なさったときに、柿本朝臣人麻呂が作った歌

東方の野に明け方の陽光が輝くのが見えて、振り返って見ると月が沈みかけていた。

山部宿禰赤人が、富士山を遠く眺めて（作った）歌

天と地が分かれた（神代の）時代から、神々しくて高く貴い駿河にある富士の高嶺を、大空はるかに振り仰いで見ると、（富士山のために）空を渡る太陽の光も隠れ、照る月の光も見えず、白雲も進みあぐね、いつも雪が降っているよ。（まだ見ぬ人に）語り伝え、後の世までも言い継いでいこう、（この）富士の高嶺のことを。

反歌

田子の浦を通って（富士山の眺めがよい所に）出て見ると、真っ白に富士の高嶺に雪が降り積もっているよ。

山上憶良臣が、宴会から退出するときの歌

憶良めは、今となってはもうおいとまいたしましょう。（家では）子供が泣いているでしょう。ええ、その母親も私を待っていることでしょう。

東国地方の歌

多摩川では手織りの布をさらしている。（それこそ）今さらながら、どうしてこの娘がこんな

にもたいそういとしいのか。

二十五日に作った歌一首

うららかに照っている春の日にひばりが舞い上がり、(その一方で)心は切なく悲しいことよ。
ひとりで物思いにふけっていると。

父母が頭を撫でて「達者でいろよ。」と言った言葉が忘れられないことだ。